D 32　家庭環境の経験、影響、受け入れ方について

三重大教育　○中島喜代子

目的：住居観がどのようにして形成されるのかというメカニズムを探る研究の一環として、その形成に重要な鍵を握ると考えられる家庭環境歴をとりあげ、本報では、各家庭環境の経験率、影響率、受け入れ方について検討し、また家庭環境を経験することにより、個々の住意識にどのような影響を与えるかについても検討する。また、将来動向の把握を明確にするため、独身の子供（大学生）と父母との上記の相関についても検討することとした。

方法：「しきたり」、「みせびらかし」、「マイホーム主義」、「ねぐら」、「自律」、「あたらしがり」、「社会重視」、「住宅の所有」意識に関連する項目とその他の若干の項目、計28項目の家庭環境についてアンケート調査した。調査対象は、高蔵寺ニュータウン居住者（818件）と三重大学の学生（294件）およびその父（298件）、母（292件）である。調査期日は、前者が昭和46年7月8日、後者は昭和46年7月～47年1月である。

結果：①高蔵寺ニュータウン居住者において家庭環境の経験率の少ない項目は、三重大学生の世代になるとより低くなる傾向がみられた。それは、家制度とつながる部分、しきたり的な経験のうち空間の使い方に関する部分、ねぐら的な住経験に関連する事柄である。②家庭環境の受け入れ方については、経験率の場合と同様の傾向を示すが、子供の世代でどちらともいえないα率が父母に対して相対的に高い項目と低い項目があり、住意識の内容により住意識形成の時期のずれが把握できた。③家庭環境による影響については、受け入れ方との関連がみられた。④家庭環境歴とそれに直接関連をもつ住意識については、それぞれ明確な関連を示し、これが住意識の形成の大きな要因になることを検証した。